

新『教会通信』(2019年4月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『**凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、
功なくして神の恩恵により、
キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり。』**

(ロマ書第3章22, 23節)

ロマ書の筆者パウロは、ローマの市民権を有つユダヤ人にはありますが、神の御旨に依つて異邦人へ神の福音を委託された伝道者であります。

主の御霊に依つて彼が導かれた上記の聖言と、この聖言を基として関連する他の聖句などを添えてお勧めをさせていただきます。

神様の御前に、罪を犯した事が無い人間は一人もおりません。

つまり、神様からご覧になられて、義しいとされる人間は誰一人として存在しない事になります。

神は、人間をお創りになられた時に他の動物の類とは異なり、“神が土の塵で人間の像を創り、その鼻に生氣を吹き入れられたので人間は即ち生霊となった(創世記第2章7節)”と“生霊”なる言葉が記録されている事からして、神の御意は人間を永遠に活きる者、とのご計画の下に創造なされたと解釈する事が出来ます。

主イエス様が、十字架にお掛かりになられ三日目に甦られて、初めにマグダラのマリヤに頭れ次いで十二使徒達に会われて、そこで主は“平安なんじらに在れ”

“父の我を遣わし給えるごとく、我も亦なんじらを遣わす”(ヨハネ傳第20章21節)と仰有り、息を吹きかけて、こう言われました。“聖霊を受けよ”(ヨハネ20:22)。

“生霊”と“聖霊”は異なりますが、共に“霊”であります。

またエペソ書第1章4節と5節に、“世の創の前より我等をキリストの中に撰び、御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。”

是らの聖言から総合的に判断致しまして、神は、人間の始祖を創造される以前から、或る時を境にして特定された者達だけと永遠を偕になされるご計画を立てておられた事になります。

人類の誕生も人の御救いも、神様の独壇場であられます。

前述の、復活なされた主イエス様が十二弟子達に頭れて“聖霊を受けよ”と仰有

って息を吹きかけた件くだりに付いて、その事に関わる聖句を用いて少しく説明せつめいをさせて頂きます。

創世記第5章1節に“神人を創造り給いし日に神に象りて之を造り給い”と“神に象りて”と示されておりますが、同じ第5章3節には“アダム百三十歳に及びて、其像そのかたちに循い己に象りて子を生子”と、当初に神は人間を神に似た靈的な面を有つ者として創造られましたが、エデンの園で罪を犯したアダムは肉的な自分に似た者として、その息子セツを生んだ事をわざわざ指摘してきなされております。

アダムの長男カインは次男アベルを嫉妬の故に殺しており、アダムの系列から抹消まつしょうされておりましたので、彼はセツを跡継ぎとしており、そのセツが我ら人間の元祖がんそと成っているのです。

その為に、復活後の主イエス様は、十二名の弟子達の中で特定の人物の名を挙げる事なく、息を吹き掛けて“聖霊を受けよ”と仰有られた事は、人間の聖き靈への復活しきをも示唆してあります。

冒頭ぼうとうのロマ書第3章24節の聖言みことばに戻ります。

◎『功なくして神の恩恵により、

キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせられたり。』

凡ての人間はサタンすべ（悪魔）の誘惑ゆうわくに負けて罪を犯しましたので、その時点で神の考えておられる“義”に到達する者はいなくなりましたが、神の御子イエス・キリストの十字架での御業みわざの結果、人間の罪は贖あがなわれる事になりました。

此の地上あらかに顕れて下さった主キリスト・イエス様が語られた、神のご経綸と福音との数々を信じて従う者、また主の御再臨を待ち望む者は、ヨハネ傳第3章“水と霊”とのバプテスマに依る御救いに与り、罪の世から贖あがなわれ“義”とせられ神の子とさせて戴きました。

我らの罪・咎とがの為に、主イエス様の貴いお生命いのちがその代価として十字架にて支払われ、私達は救われたのであります。

愛しみの獨子キリスト・イエス様が十字架にお掛かりになられる事をお許しなされた父なる神様の御心は、如何ばかりのお苦しみであられた事でしょうか……。

また、お痛みやお苦しみは言うまでも無く、敵対するサタンの勝利に満ちたほくそ笑みえみをも恥とも為さらず、やがて訪れる我ら神の子達との永世を心に描いて、耐えて耐えて下さった主イエス様と父なる神様の靈・肉の御苦難ごくなんを、私達は決して忘れてはなりません。

神の聖霊せいれいに導かれた使徒パウロは、続けてこう記しるしております。

◎『我らは思う、人の義とせらるるは、律法の行為によらず、
信仰によるなり。』 (ロマ書第3章28節)

◎『さらば誇るところ何処ほこにあるか。既に除はずかれたり。』

何の律法に由りてか、行為の律法か、然らず、

信仰の律法に由りてなり。』 (ロマ書第3章27節)

上記二つの聖言の順序を逆にしてありますが、その意図を汲み取ってご拝読下さい。

我らが信ずる御救いに与ると言う事が、旧約聖書に記された律法、即ち行為を全うする事では無く、主を信ずる信仰だけに由るものである、と定義づけて仕舞いますと信仰生活の中に誤謬が生じて来ますので、此処に一言付け加えてきます。

確かにロマ書第10章4節◎『キリストは凡て信ずる者の義とせられん為に律法の終となり給えり』とあり、故に律法の凡ては廃棄されて、どんな行為をしても構わないと言われたのでありましょうか？

私(筆者)は、神がモーセを通して選民ユダヤ民族に課した律法は、神の御性質・御品性そのものであるかと存じ上げております。

故に、律法を蔑ろにしても良いと言うものでは無く、時代的背景やユダヤ民族固有の事情を以て律法と為されたものを除いては、現代も主イエス様を信ずる我らには信仰心の基にしっかりと踏み締めていなければならないものである、と私は確信しております。

その事はパウロも、ロマ書第3章の終わりに明記しておられます。

◎『然らば我ら信仰をもて律法を空しくするか、決して然らず、
反って律法を堅うするなり。』 (ロマ書第3章31節)

我らの行為は、我らの生活を常にご覧になっておられる神様が評価判断の基準となさっておられる事は当然でありましょう。

また、私達が福音伝道をする時、その福音を受け入れるかどうかの判断を左右するのも、我らの普段の行動や行為が大きな尺度と成って参ります。

我らの普段の行為の為に、主イエス様のご尊顔に、泥を塗るような事になっては申し訳ない事であります。

旧約聖書に録された律法の行為に関する聖言は、新約の使徒パウロの書簡にも数多く出ており、またヤコブ書に至っては、その全体に倫理的教訓としての指導が主体と成って、律法が登場して参ります。

◎『義人は信仰によりて生くべし』(ガラテヤ3:11等)との聖言を標榜する宗教学者でありプロテスタントの祖と謂われるマルチン・ルターは、此のヤコブ書を“藁の書簡”である、として侮っていたとの批評文を、私は目にした事があります。

ヤコブ書第2章23, 24節

◎『またアブラハム神を信じ、その信仰を義と認められたり

と言える聖書(旧約)は成就し、かつ彼は神の友と称えられたり。

かく人の義とせらるるは、ただ信仰のみに由らずして

行為に由ることは、汝らの見る所なり。』

信仰の父と称されるアブラハムは、神のお言葉に従って最愛の独り児イサクを祭壇に献げた時、神に依ってその行為が“義”と認められた事は旧約聖書の創世記第22章に記録され

ております。

『義人は信仰によりて生くべし』との聖言は正論であり、また“信仰”自体も行為を無視して成り立つものではなく、“行為”に伴う“愛”に欠けるとしたら、“愛”であられる神に従う聖徒としては不適格である事は、世的な教役者達を含めて凡てが是とする処でありましょう。

ヤコブ書は、第1章1節に“散り居る十二の族の平安を祈る”とユダヤ民族に対する挨拶から始まっておりますから、ユダヤ教者に書いたものと思われがちですが、聖書の編集・編纂権の凡ては神ご自身のご裁定下になされている事を、私は確信しております。

ヤコブは、こと細かに信仰と行為が一致しなければならない、と後の世の信仰者となるべく定められた私達に書き残しておられます。

また行為には憐憫が伴わねばならない事も、強調しております。

その一つを書き記しておきます。

◎『もし兄弟或いは姉妹、裸体にて日用の食物に乏しからん時、汝等のうち、或る人これに、
“安らかにして往け、温かなれ、飽くことを得よ”と書いて
躰に無くてはならぬ物を与えずば、何の益あらん。』

(ヤコブ書第2章15, 16節)

◎『斯くのごとく信仰もし行為なくば、死にたるものなり。』

(ヤコブ書第2章17節)

上記ヤコブ書第2章15, 16節を、我らの日常語に照らして記します。

※『もしも、信仰を共にする兄弟か姉妹が貧乏して、着る物も粗末な物で、その日の食べる物にも欠けている様子に出遭った時、貴方たちの或る者が、その人に向かって“安心してお帰りなさい。お祈りしていますからね。温かい洋服を着るんですよ。お祈りしていますからね。お腹いっぱい食べるんですよ。お祈りしていますからね。”と言って、現実に無くてはならない品物やお金を与えようとしなければ、信仰って一体何なんですか？』

そして2章17節では、こう断言しております。

※『このように、信仰に行為が伴わなければ、只の役立たずである』

信仰とは相手に対する深い憐憫が常に伴うものであり、憐憫は“愛”そのものでありますから、最後の大審判の折、憐憫なき者は憐憫なき厳しい審判を蒙る羽目に陥る事になります。(ヤコブ2:13参照)

ヤコブ書で言う“行為”は、その凡てが主イエス様が最後の晩餐の折に仰有った“新しき誠命”の中の“我が汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし”(ヨハネ13:34, 35)との“愛”即ち行為を指しております。

ヤコブ書は、決して宗教学者のマルチン・ルターの言うが如き、“ヤコブの書簡”は火を点ければ一瞬にしてポーウと消えて無くなる“藁”のような軽い存在、では決してありません。

末の世であると言われる現代、私達が拝読する聖書の中で一番大切に致さねばならない文章は、主イエスの御霊・聖霊に関して認められた箇所であり聖言であります。末の世は、イエス之御霊の時代であります。

聖霊のリバイバルが預言された現代は、正に主の聖霊が働き給う初代教会の復活を意味し、主の御霊を以て礼拝を致さねばなりません。

神の霊を戴く事が、聖書を拝読する者には絶対に必要であります。

何故ならば神ご自身は霊のご存在であられ、聖書は、神に用いられた預言者に与えられた聖霊の働きに依って、神の感動がその儘に受け止められ、書き留められたものであります。

聖霊・御霊を受霊していない者が、聖書をどれほど熱心に拝読しても、聖書は神の霊がその感動を以て書き示したものでありますから、神の聖き霊と無関係の者達には、神の真理を自らの物とする事は出来ません。

◎『聖書はみな神の感動によるものにして、
教誨と譴責と矯正と義を薰陶するとに益あり。』

(テモテ後書第3章16節)

◎『なんじら先づ知れ、聖書の預言は、
すべて己がままたに積くべきものにあらぬを。
預言は人の心より出でしにあらず、
人々聖霊に動かされ、神によりて語れるものなればなり。』

(ペテロ後書第1章20, 21節)

さて、いよいよ主イエス様のご再臨が差し迫って参りました。

不思議な事に、主イエス様の初臨、つまり初めて此の地上に来られる事に付きましても旧約聖書に幾度も幾度も繰り返してその預言が述べられておりましたが、実際に主が顕現なさいましても、ユダヤ人の中にその事を真摯に正しく取り上げる者が少なかった事を顧みる必要があります。

主のご再臨が、もう其処まで近付いて来ております。

神の人類に対するご計画・ご経綸の悉くは、歴史の中に顕れ成就されて参りました。

嘗て神に依って選ばれた民族の国イスラエルは、紀元70年に消滅し、国民は世界中にちりぢりばらばらに成りましたが、神の預言は西暦1948年に成就し国連の採決に由ってイスラエル国の再建が認められました。

此の地球上の何処の国に約二千年もの間、消滅していた国家が再び建国されたという前例があったでしょうか？

神の預言を何十世代にも亘って、疑わなかったユダヤ民族の信仰の底力を褒めたくありませんが、此処にも神の働きと援助が無ければこんなにも長期に渉る希望が、おいそれと適うものではありません。

もう一つ、信仰上の重大な預言の成 就は、神の御霊・聖霊のリバイバル=復活であります。

主の聖霊の降臨に依って開かれた初代教会でありましたが、二世紀半ばには聖霊の降り注ぎが無くなり、その後、永く続いた真の教会の暗黒時代を経て、末の日に後の雨として聖霊

降臨が預言された如く、求むる者に惜しみなくリバイバルされて参りました。

聖書は、その総てが神の御心であり神の御声そのものである事を、聖書に接する我らは明確に識るべきであります。

さて、私達には、神様からそれぞれに使命が与えられております。

神の子供に相応しい者として成長した我らを、主イエス様は先ず空中へと携え挙げると同時に、御自らも空中へと御来臨下さいます。

テサロニケ前書第4章17節に録された、所謂空中再臨であります。

時を同じくして地上に残された者は皆、七年間の開闢以来、誰も体験したことが無い怖ろしい大患難の期間を過ごさねばなりません。

それらの事が預言されている期日は、誰もが“こんなに世の中は穏やかではないか”と思われる程に平穏な日々が続いている最中に唐突に起こる現象である、と新旧約聖書を通して幾度か預言されている全人類に取って聞き逃してはならない警告であります。

つまり『人々の平和無事なりと言うほどに』（テサロニケ前5:3）と言われている期間は、それほど長いものでは無いと思われませんが、その期間こそ我らに取って、此の地上に於ける貴重な最後の時間と言えましょう。

再度記しますが、此の地球上に七年間の大患難が始まるその日には、神の子と定められた者は皆、空中へと携え挙げられて参ります。

神の定められた御救いに関する我らの働きは終了し、再び“水と霊”の御救いが復活する事はございません。

つまり、ユダヤ民族を除く異邦人である者達に取って、其の日を境に誰一人として神と永遠を偕にする幸いなる者は誕生しない事になります。

只今、私達が神様から授けられております福音伝道の使命も、それから先はもう何の意味も持ちません。

あなたの愛する者達も、何時もあなたの身の廻りに居て助け合って来た友達も、あなたの恩人とも言えるあの方やそのご家族の方達も、それらの方々が御救いに与ってあなたと一緒に神の子として天国で過ごす可能性は、もう無いのです。

そればかりか、その人たちは七年の間、恐怖と激痛と過激な重圧を身に帯び、その後千年の間、黄泉と呼ばれる意味の無い不安や苦悩の中に閉じ込められ、最後の大審判が開かれる日まで脱出する事は出来ません。

その大審判でどのような判決を受ける事になるかは不明ですが、少なくとも神の子供と成るような幸運が待ち受けていない事は事実であります。

私達は今、伝道出来る方々に語らねばならない時であります。

そうしなければ上記のような永遠の苦しみの中に、あなたの親しい人々をあなた自身が追い遣る事になるのです。

私達は何らの努力や苦難を体験すること無くして、主イエス様の十字架の御業に由る“水と霊”の御救いに与ったではありませんか。

もし私達の心に一欠片の“愛”が有るのならば、自分に取って大切な人だけにでも、此の幸いな福音を宣べ伝えるべきであります。

イスラエルと近隣諸国との和平交渉が、水面下で行われている事実が、先月の中央地域新聞の記事に取り上げられておりました。

米国の現大統領が、イスラエルと友好的である事は周知の事ではありますが、大統領の娘婿でユダヤ教徒のクシュナー上級顧問なる人物が、先の二月に中東諸国を歴訪し、エルサレム旧市街地のパレスチナ側とイスラエル側との二分方法やヨルダン川西岸地区のパレスチナ側に有利な分割方法などを持って“地ならし”訪問をしたとの事。

勿論、双方に意見の相違が有りますが、4月9日のイスラエル総選挙の結果、ネタニヤフ首相の国内的立場がどう変化し、それに依って米大統領が和平条項をどう持ち出すか？神の子としては結果が、気になる処です。

此の和平が、旧約聖書エゼキエル書第37章及び第38章や新約聖書テサロニケ後書第5章3節等に載っております“末の日”に関する記事と連結している可能性は大きく、中東和平を機に一気に聖書の末日預言は成就し、その終末へと向かう事も、一概には否定は出来ません。

何時、和平が実現し、どの程度の規模であるのか、つまり此の儘、世界平和への可能性もたらされて“ああ、これぞ正しく平和無事なり”とイスラエルの人々や世の人々が安堵して、その気持ちが口から出て来るようであれば、主イエス様のご再臨を待ち望む我らに取りましては、大いなる歓喜の日となる可能性がある事になります。

勿論、聖書には、ご再臨の日が何時であるか天の父なる神様以外は知らないと記しておりますから、其の日を特定する事は赦されませんが、いよいよご再臨の日が近い事は、聖書の随所に記されておりますから、我らは、その備えを何時も心懸けていなければなりません。

時は、刻一刻と縮まって来ております。

◎『眠れる者よ、起きよ、死人の中より立ち上げれ。

さればキリスト汝を照らし給わん。』(エペソ書第5章14節)

何時まで眠っているのですか？目を覚まして現実を視てみましょう。

天の父なる神様にお逢いした時、神様から、お声が掛かります。

◎『貴方は、私の導きにととても忠実でした。

私は、その事が大変に嬉しくて、とても喜んでおります。

貴方へのご褒美は、沢山に用意してありますよ。

さあ、どうぞ、貴方も、私達の喜びの席で一緒にお祝いしましょう。』

(マタイ傳第25章21節)を私訳

私は、此のように神様からお声を掛けて戴ける夢を懐いて、八十路からの残りの人生に希望を託して参りたいと存じております。

神の御前には人は皆が神の子供であり、年齢には拘り無く神に愛される諸聖徒方、さあ、神のご全家の席に着かせて戴きましょう。ハレルヤ！

(2019・4・1 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)